

## 歌うシンデレラ

難波 美和子（比較文学）

### 1 はじめに

昔話「男装の王女」では、女主人公は思慮深く、勇敢である。彼女たちは、たとえ最終的には容認される秩序の中に戻っていくとしても、苦境に耐えるのではなく、立ち向かい、自らの力で事態を打開しようとする。その意味で、昔話は美しく善良な娘が忍耐強く従順であることによって、良い結婚という幸福を手に入れることができる、と説く、とばかりはいえない。幸福を手にするためには主人公の決断が、援助者という形で登場する運と同じくらい、決定的に必要なのである。だから口承の中では、ときには「シンデレラ」もガラスの靴をうっかり落としていくのではなく、わざと置いていくことになる。語り手たちの感覚では、いかに幸福になるべき主人公といえども、それくらいの意志は働かせる必要がある。

「シンデレラ」はウォルト・ディズニー社のアニメーション映画のイメージが強いこともあり、「虐待されているが、美しく従順で家庭的な娘が、妖精の名付け親の援助で（つまり自身の努力ではなく）、その美しさを表現する機会を得て、王子に見出されて結婚を獲得する」という物語であり、女性にとっては美しさと従順さが、社会階層上昇の手段であることを世代を越えて刷り込んでいる、とみなされることがある。私は、ディズニー社の『シンデレラ』<sup>1</sup>にその要素が強くあること否定しない。ディズニーによって、シンデレラを「はにかみやで自分の力ではどうにもできない夢見る少女であり、歌を歌いながらじっと根気強く自分を助け出してくれる王子様を待ち続ける『かわいらしい』女の子になってしまった」<sup>2</sup>。「シンデレラ・コンプレックス」<sup>3</sup>という用法は明らかに、ここから発している。

シャルル・ペローの「サンドリヨン」やグリム兄弟の「灰かぶり」の中にも美しさと従順さが幸福な結婚に結びつく、というメッセージが明瞭<sup>4</sup>だとは言え、口承の中のシンデレラには、もう少し女性主人公の行動の意志が見られるし、主人公の亡母の靈魂の働きや、主人公自身の死と再生という、「幸福な結婚」という目標では完了しない、苦難とその打開への意志が語られることも多い。そして女性の美点と

みなされることが、「シンデレラ・サイクル」に属する類話の中でも異なっていることもある。日本の昔話の中の「シンデレラ」の類話を概観して、それぞれの場合の、女性の積極性や能力についての語りを考えてみよう。

## 2 シンデレラのさまざま

「シンデレラ」は、なんといってもウォルト・ディズニー社版のアニメーションによってもっとも良く知られているだろう。そのイメージは、東京ディズニーランドにも存在する「シンデレラ城」によって象徴されるように「おとぎ話」的なるものの代表とみなされるかもしれない。また、映画に描かれた、ネオ・ゴシック風の宮殿、舞踏会、ヒロインと王子のロマンス、ガラスの靴、いずれを取っても「シンデレラ」はヨーロッパの文化と深く関わっているように見える。しかしそれらはディズニー版「シンデレラ」が元にしたシャルル・ペローの「サンドリヨン」による17世紀フランスの上流階級の嗜好の反映であると考えられる。19世紀以来の多くの民俗学者たちの調査、研究の成果によると、「シンデレラ」に類似する昔話は、ほとんど世界中で語られてきたのである<sup>5</sup>。これらの物語は昔話研究の分野では「シンデレラ・サイクル」と呼ばれている。これらを概観すると、ペローの「サンドリヨン」やグリム兄弟の「灰かぶり」などは「シンデレラ・サイクル」の類型のひとつであることがわかる。そしてこの話型は、「天人女房」または「白鳥乙女」の話と同様に、世界中に広がっているのである。各地の類話が極めて相似性が高く、伝承の発生地や伝播の経路とに興味を尽きない話の一つでもある<sup>6</sup>。

昔話のタイプ・インデックス<sup>7</sup>では「シンデレラ・サイクル」の話群は510に分類され、AからDまでの異型が挙げられている。AT510は以下の6つのモチーフをもつものとされている。

### AT510 「シンデレラといぐさのずきん」<sup>8</sup>

#### I しいたげられた主人公

- (a) 主人公は彼女の継母と継姉妹によってしいたげられる。
- (b) 主人公との結婚を望む父から変身して逃れる。または、
- (c) 塩と同じくらい愛している、と言ったので父に追い出される。あるいは、
- (d) 召使によって殺される運命にある。

II 魔法の援助。主人公が召使としてふるまっている間、(家で、または他人のなかで)、彼女は忠告を受け、必要物を供給され、食物を与えられる。<sup>9</sup>

### Ⅲ 王子との出会い

- (a) 主人公は美しい服を着て数回王子とダンスをする。
- (b) 主人公は自分が女中として耐えてきたしいたげについて暗示する。あるいは、
- (c) 彼女は自分の部屋または教会で美しい服を着ているのを見られる。

### Ⅳ 同一人物であることの証明

- (a) 主人公はスリッパテストによって発見される。または、
- (b) 王子の飲み物の中に投げ込んだ指輪、または王子のパンの中に投げ込んだ指輪によって発見される。
- (c) 主人公ひとりが騎士の望む黄金のりんごを摘むことが出来るので発見される。

### Ⅴ 王子との結婚

Ⅵ 塩の価値。主人公の父は塩の入っていない食べ物を出されて、彼女の以前の答えの意味を知る。<sup>10</sup>

第一のモチーフの多様性は冒頭モチーフが変化しうることを示している。第二モチーフの援助者はしばしば母の霊とみなされる。第三から第五のモチーフ、主人公が苦難から抜け出す契機となる「発見」と「同一性の回復」が主要なモチーフであると考えられる。このモチーフはヨーロッパの話型から作成されており、用語もヨーロッパのものだが、次の話が、上記のモチーフ構成に合致することは容易に理解できるだろうと思う。

#### 「糠福米福」<sup>11</sup>

昔、あるところに姉妹があり、姉を糠福、妹を米福といった。姉は継子で、母親は糠福をいつもいじめていた。(Ⅰ)

栗拾いに行くときには、姉に穴の開いた袋を持たせたので、夜になっても袋がいっぱいにならなかった。空腹になったのでひとりで川で水を飲んでると元の母が白い小鳥になって飛んできて、小袖と笛、新しい袋をくれた。その袋に栗を拾って帰った。(Ⅱ)

祭りの日に、母は妹に良い着物を着せ、姉には麻糸を見結び績むことを命じて出かける。姉は友人の助けで仕事を終え、小鳥に貰った小袖を着、笛を吹きながら祭りに行く。姉は先に帰って着物を着替える。翌日、隣村の人が姉を嫁に欲しいと言って来る。(Ⅲ)

母は妹を嫁にやろうとするが、化粧比べで姉の方が勝っていた(Ⅳ)ので、姉は立派な籠に乗って嫁ぐ。(Ⅴ)

妹は姉をうらやましがったので、母は妹を荷車に乗せ、嫁は要らぬかといって歩く。妹は田に転げ落ちてタニシになり、母は堰に落ちて堰具になった。

これは青森県津軽七ツ石の話である。類話は青森県から沖縄まで広く分布し、とくに東北地方に多く伝わっている<sup>12</sup>。主人公が妹に対する優位性を発揮するのが祭りという場であり、妹を偽の花嫁に仕立てようとするところにも「シンデレラ」との類似性が見られる。主人公はここで人目を引く行動を取り、目的をもって行動している。そして妹には自分が来ていることを知らせるのだから、決しておとなしくはない。ただこの話では、継子である姉娘の結婚相手が何者であるかがほとんど語りの関心の中になくようにみえる。語り手の関心は、継子いじめの方法と、いじめられていた継娘が継母と妹を見返すという点にあるようだ。

同じ510に分類されるが、家を出て放浪する女性主人公が、醜く変装して働く家の主人の息子に見いだされる「いぐさのずきん」は、日本では「姥皮」が相当する。やはり青森県から沖縄にまで分布している。『御伽草子』に口承話とあまり変わらない話が採録されており、室町時代には知られていたと考えられている。近代の口承には、ただ継子で家を追い出された、という場合と、「蛇婿入り」や「猿婿入り」に接続して語られる場合とがある。

「姥皮」<sup>13</sup>

女性主人公は、蛇から蛙を助けた父親の約束に従って蛇に嫁入りし、針とふくべで蛇を退治する。

(I)

助けた蛙から貰った「姥皮」をかぶって年寄りの姿になる。(II)

ある長者に雇われて釜焚き婆をしているが、自室で元の姿で本を読んでいるのを若旦那に見られる。(III)

恋煩いになった若旦那に家中の女が薬を運ぶが、誰の薬も若旦那は飲まない。最後に主人公が姥皮を脱いで薬を運んで行くと、若旦那は薬を飲み、病気が治る。(IV)

主人公は若旦那と結婚する。(V)

この「姥皮」の類話では、女性主人公は、「シンデレラ」の舞踏会に相当するような祭りの場で着飾っているのを見出されるのではなく、自室で本来の姿になっているところを覗き見られることによって、求婚者に発見される。その意味では主人公は積極的な行動をしてはいない。祭りに着飾っていくのは、かなり強い自己アピールであり、働きかけとみなせる。しかし、注目したいのは、この話型ではしばしば、女性主人公は「本を読んでいる」ところを目撃されるという点である。「本を読む」のは昔話の中ではかなり珍しい情景であるし、それが女性主人公の「真実

の」姿が見出され、求婚者の心を捕らえる場面である。類話によっては「風呂場で姥皮を脱いでいるところを覗き見られる」という語りもあり、こちらはより客体化されているといえるかもしれない<sup>14</sup>。ともかくも「姥皮」では、使用人の最下層に属するはずの火焚き婆が本を読み、その実体が若く美しい女性であるという意外性を、若旦那の視点に移った聞き手に印象付ける。「蛇婿入り」もしくは「猿婿入り」という前段で見せた女性主人公の「親孝行」や蛇または猿を退治する機転もしくは知恵に代わる、好ましい点として、この場面は語られている。

#### 4 歌の徳

日本の昔話の中には「歌」による求婚を扱ったものがある。この場合の歌は、いわゆる「和歌」である。「謎解き婿」では旅先で出会った女性が男性に歌を詠み掛けて別れる<sup>15</sup>。男はその意味がわからないが、座頭などに教えてもらってたずねていく。さらにそこでいくつかの難題を解き、結婚にこぎつけることになる。他にも、婿選びで、娘または父親が詠んだ上の句にもっともよい下の句をつけたものを婿にするという話で、もっとも軽んじられていた者が成功するという話がある。逆に、せっかく教えてもらった句を忘れてしまって失敗すると笑い話になる。これらの場合、歌を詠みかけてるのは女性であり、謎を解くのが男性である。これは「和歌を詠むことが女の教養とされた歴史や、男女が求愛のために歌をかけ合ったという古い歌垣の民俗を背景とし」<sup>16</sup>、和歌というものに高い評価を与え、それを詠む能力を魅力的なものとして捕らえた文化が、このような話を伝承する人々の中にあっただろう。そのような前提に立ってみると、「姥皮」で主人公が「歌の本」を読んでいるのを見た男性が恋の病に落ちるのも、「見る」事が男女関係を意味するという古典の伝統に加え、「歌を詠む」ことと「恋を語る」ことがほとんど同じ意義を持つからだと理解できる。舞踏会ですばらしいドレスとダンスで社交界の教養をアピールしたのがサンドリヨンであるならば、日本のシンデレラは和歌で主張する。事実、歌の掛け合いが主人公の結婚の契機となり、同一性の証明となる話がある。これは継子話で、広い分布域を持つ。歌によって本当の花嫁が明らかにされることを共通として、東日本と西日本では、語り方に差があるとされる。<sup>17</sup>

「さらさら山」<sup>18</sup>

おふじという娘が川で葉を洗っていると、殿様が通りかかって歌を詠みかける。機知の利いた和

歌で答えたので、気に入って、家来におふじの家に迎えに行かせる。おふじの継母は実の娘を出す  
が、娘は、盆の上に皿を載せ、塩を盛り上げて松の枝を挿したものを歌に詠めといわれると、歌と  
はいえないものを詠む。おふじが呼び出され、「盆皿や盆皿や やさらが嶽に雪降りて 雪を根と  
して育つ松かな」と詠む。家来はおふじを城を連れて行く。家を出るとき、「今までは おふじおふ  
じと いわれていも 明日から先はおふじ様なり」と詠む。

歌を詠みことが求婚の作法として働き、女性主人公の能力や性格を示している。  
おふじは「川の波の数は」と問われると、「馬の足跡の数は」と問い返し、「妻にす  
るには背が低い」と言われると「山のつつじは背が低くても咲く」と答える。彼女の  
歌は積極的に相手に働きかけ、自分の現状を変える。しかも彼女は出発に際して  
継母に対してあてつけの歌を歌う。この主人公が、その競争者である妹より優れて  
いるのは歌を詠むことである。それは彼女を、現在の苦勞から解放する力となり、  
そのことを彼女は十分に活用する。それはこの昔話の伝承圏ではたたえられること  
であって、継母に棄て台詞を残しても、歌であることによって、容認される。理不  
尽なことでも耐えるというような「美德」は要求されておらず、そのような反撃を  
語り手は批判しない。

## 5 まとめ

昔話はふつう、規制の秩序を大きく揺るがすことはない。その中で秩序を倒立さ  
せて権威を笑い飛ばしたり、主人公がいかに困難を克服していくかを物語る。その  
際に、一時的に秩序を混乱させたり、通常は認められない手段をとったりする。昔  
話の主人公は決して「良い子」とばかりは限らない。実に様々な人間の姿が、昔話  
の中では語られる。伝承の中では、シンデレラは王子の登場と救助を待っているだ  
けの女の子ではない。彼女は貶められた地位を回復したいと願っているからこそ、  
舞踏会に臨む。「いぐさのずきん」も「ロバの皮」も受け入れがたい災厄を振り払い、  
失った地位を取り返すだろう。それが「結婚」という手段でしか実現できないこと  
が、昔話の限界とは言えるだろう。

日本に伝承される「シンデレラ・サイクル」の話群でも、主人公の女性たちは活  
発に動き回ったり、争ったり、自己主張を行う。祭りにいけないことを嘆くのでは  
なく、堂々と祭りに行き、自分を宣伝してみせる。「蛇婿入り」「猿婿入り」で異類  
の夫を排除してからは、自分の運を切り開くために旅に出る。彼女たちの醜い変装  
は、機会が来るまで、彼女たちを守るものと考えられる<sup>19</sup>。その変装を解くのは、地

位が回復される条件が整ったときだ。彼女たちの真の姿を評価できる人物が現われるのだが、単に救援を待つだけではなく、積極的に主張する。特に「歌」という表現方法を持った主人公は、相手のからかいを言い負かし、自分の価値を突きつける。

『シンデレラ』の主人公は、若い世代から野心や希望を持つことの価値を見失わせるかもしれないが、その口承の姉妹たちは、自分の存在を主張することや、自分の決断が決して無意味ではないことを、漠然とした形であれ、伝えることができるのではないだろうか。「皿々山」のおふじの棄て台詞が、後味の悪いものであったとしても、主人公の思いを吐き出すことで、語り手も聞き手も、解放されるのだ。

- 
- 1 ここでは、昔話の話型としては「シンデレラ」、ディズニー社製のアニメーション映画をさす場合には作品名として『シンデレラ』と表記する。
  - 2 ジェーン・ヨーレン「アメリカのシンデレラ」(アラン・ダンダス編『シンデレラ 9世紀の中国から現代のディズニーまで』池上嘉彦・山崎和恕・三宮郁子訳、紀伊國屋書店、1991年)
  - 3 『シンデレラ・コンプレックス』は「王子様の出現により窮地から一転して救済されるシンデレラの童話を借りて、女性の深層に根強く潜む“他者によってまもらえていたいという心理的依存願望”について分析した書」。『岩波 女性学事典』岩波書店、2002年より。
  - 4 ペローの作品は17世紀フランスの貴族階級の若い女性を読者として書かれており、グリム兄弟の物語はペローの作品の影響下にあることは推定されている(小澤俊夫『グリム童話の誕生』朝日出版社、1992年などを参照)。グリム兄弟の時代は女性の居場所としての結婚、家庭のイメージが形成されていく時代にあっていた。
  - 5 アラン・ダンダス編『シンデレラ 9世紀の中国から現代のディズニーまで』(池上嘉彦・山崎和恕・三宮郁子訳、紀伊國屋書店、1991年)を参照。本書は Alan Dundes, ed. *Cinderella: A Casebook* (New York, 1983) の抄訳。また、江口一久『北部カメルーン・フルベ続の民間説話集 アーダマーワ地方とベヌエ地方の話』(国立民俗学博物館調査報告45 2003)にも「シンデレラ・サイクル」に属する「ロバの皮をかぶった娘」が採録されているように、伝承圏は実に広い。
  - 6 9世紀に筆録されたとされる中国の『酉陽雜俎』にある「葉限」は中国南部の少数民族の伝承と考えられるが、「サンドリヨン」や「灰かぶり」との類似性がとても高い。注5の文献を参照。また、日本で「灰坊」、ヨーロッパでは「しらくも頭」と呼ばれる男性を主人公とした類似話型が存在する、ということも、この話型の興味深い点である。
  - 7 Aarne, A. and S. Thomson, *The Types of the Folktale*, 1964, Helsinki, (FFC 184).
  - 8 小澤俊夫『世界の民話 25 解説編』(ぎょうせい、1978.) pp.201-202. から抜粋。
  - 9 援助者は(a)主人公の死んだ母親、(b)母の墓の上の木、(c)超自然的な物、(d)鳥によって、(e)やぎ、羊、牛、(f)やぎ(牛)が殺されると、そこに遺体から魔法の木が生える、などが挙げられている(a)人公の死んだ母親の霊と考えられるで、霊魂がこの世に再生する姿のヴァリエーションとみなされる。
  - 10 このモチーフは第一のモチーフが(c)「塩のように愛する」であった場合にのみ有効なモチーフ

- フである。第一のモチーフが(a)「継子いじめ」であれば、第六のモチーフが付かないか、継姉妹による偽の花嫁の話型が接続していくことがある。(b)「父の求婚から逃れる」であれば、父との対決または和解のモチーフとなる。
- 11 柳田國男監修『日本昔話名彙 第二版』(日本放送協会、1971)、pp.44-45。「糠福米福(粟福米服)」を、モチーフを分かりやすくするために省略した。
  - 12 「米福粟福」(日本民話の会編『決定版 日本の民話事典』講談社、2002、pp.94-95)
  - 13 「うば皮」(日本民話の会編『決定版 日本の民話事典』講談社、2002、pp.31-33.)を省略して記述。
  - 14 風呂場での覗き見という発見は、聞き手を主人公から引き離し、求婚者となる男性の側に視点を置かせる。姥皮をかぶった老人の身体と、それを脱いだ若い身体をより明確に対比させると同時に、性的な連想を働かせる効果もあるかもしれない。主人公は見せるべき相手に自分の真の姿を見せるという解釈もかのうだろう。「姥皮」と構成的に類似し、やはり『御伽草子』にある「鉢かつぎ」では、彼女に関心を持つ主人の四男が、風呂焚きをする鉢かつぎに浴室での奉仕を命ずる。ここでは性的な関係が先に成立し、主人公は鉢をかぶったままである。書き手・語り手の性別を検討すべきかもしれない。
  - 15 女性の住所を読み込んだ謎の歌の一例は「恋しくば 尋ね来て見よ 十八の国 赤めてたたくトンチン町 夏吹く風の 御所どころ」(「難題婿——歌の謎」『日本昔話通観 長崎・熊本・宮崎』同朋舎、1980年 pp.64-65. より)。「十八の国」という句が含まれている例話が多い。ちなみに「若狭の国」と解かれる。
  - 16 日本民話の会編『決定版 日本の民話事典』講談社、2002、pp.170-171.
  - 17 『日本昔話事典』弘文堂、1977年、pp.387-388「さらさらやま」の項による。東日本では糠福米福にあるような継子いじめのモチーフが前段にあるのに対し、西日本では、歌の応酬に興味が高い。その後の収集活動によっても同様のことがいえるかどうか、詳細な分析が必要であるが、管見に入ったところでは、この傾向は現在も認めてよいと思われる。この話群は熊本県、特に阿蘇地方で多く採集されている。
  - 18 「皿々山」『日本昔話通観 長崎・熊本・宮崎』 p.57による。
  - 19 「姥皮」「蛙皮」などは援助者から、旅の安全のために与えられる。安全のための醜への変身については、大塚ひかり『プス論』(筑摩書房 ちくま文庫、2005年)が参考になる。